

教職員の皆様へ 理事長・学園長 中橋 清一

学園 IT 化推進について

学園経営の道は少子化時代を迎え、苦難の道を進むに違いない。この厳しい道を全校園あげて英知で切り拓き、活性化を実現するために、この学園 IT（情報技術）化に取り組みたいと思う。

私は、この学園に職を奉じて二十年を経過した。私の理事長室には、小・中・高・短大生が訪れ話をしていく。私は今までの中で、まだ「悪い子」を見たことがない。もちろん馬鹿な事をたくさんしてかす子はいたかも知れない。しかし、馬鹿な事をして何か輝くものがあつたり、又輝くものが隠されていたりするものである。学校という場所は学ぶに当たり最適な雰囲気や環境を提供すべき施設であると思う。

私は教職というのは、昔から聖職といわれるように、最高の職業であると思っている。我々の仕事は誰にでも踏み込めない個々の奥深くまで入り込み、接することができる。我々は最後まで結果を見届けるといふわけにはいかないけれども、その結果までの長い過程に大きな影響を与える事が出来る。

社会の教育に対する期待は、混沌とする世界情勢の中で、ますます高まりつつあるように感ぜられる。英国のブレア首相は「英国が抱える課題は第一に教育、第二に教育、第三に教育・

・・」と教育の重要性をかように強調している。

現代に生きる若者たちは、事の善し悪しは別としても、もう社会的成功だけでは満たされない、ゆとりある人生を歩みたいという姿勢を強く感じている。

またコンピューター技術の飛躍的な発展は、これまで学園が営んできた学校のあり方を根底から変えようとしている。高速のコンピューターで膨大なデータ量を収めた媒体を瞬時に検索したり、インターネットを通じて効率的に世界中の情報を調べること、教育関係者は好むと好まざるに拘わらず、世界を基盤に立つことが迫られている。企業社会においても、いまやグローバル・スタンダードを視野に入れずして、ほとんどのビジネスが成り立たない現状である。

今、学園は元気のある学園を創造し、生き生きとした学園づくりをめざし、学園が活力をとり戻す絶好の機会であると考えます。

そのためには建学の精神—報恩感謝の心を基本とし、尊敬される人間の育成を目指しその精神を現代社会に投影し、組織や教育システムなど古い習慣にとらわれずに、変えるべきところは大胆に変えていかなければならない。

大切なことは子供たちが自主的に学ぶ計画を立て、自立した大人として成長していく環境を用意することである。

教師もいかに魅力がある授業ができるかを工夫していく。つまり、お互いが切磋琢磨していくところに授業の緊張感、学園の活力が生まれてくるのだと思う。

学園を取り巻く環境が多様になり、教師の価値観も変化し、教師の目標を一つにまとめることが非常に難しくなっているのも確かである。

米国では IT の進展からコミュニケーションを電子メールなどに頼ってしまい、人と人との交流の中から新しい価値を創造する力が急速に落ちてきているという指摘もある。

シリコンバレーのハイテク企業の間では、このような状況を打開するため、人と人とのコミュニケーション力を高める工夫や、情報の共有化のための様々な工夫がされてきている。そのためには、教師が独りで情報や仕事を抱え込まず、他者を巻き込み、価値を創造できる人間関係の構築が大切である。この人間関係と情報共有化により、生産性の高い創造力のある組織が生み出されるようになる。

組織のメンバーが対立を恐れず、意見の一致を目指しつつ問題を解決していくことなど、高い成果が発揮できる環境を造り出すことが大切である。

以上述べたようなことを実際に具現化している学校一岐阜県各務原市立那加中学校を先般、幼・小・中・高・短大の有志の先生 11 名で見学してきたが、素晴らしい学校であることを眼の当たりにし、我が学園でも是非実現したいと考えるものである。

多くのメリットがある。例えば、職員会議がペーパーレスに。デジタル学級日誌—今まで紙に書いていた学級日誌の文字や画像をコンピューターで扱えるデジタルデータにする。インターネットで保護者との情報共有。生徒に軸足をおいた教育。長所・よいところを発見など、これからは学校が変わらなくてはいけないということ。生徒や先生が学校に行くのが楽しいなという思いになるようにする。さらに、生徒の能力を最大限に発揮させ、IT でゆとりを生み、IT で新しい知恵を創り、学園の生産性・競争力・成長性の変革に結びつけ、学園の生き残りに取り組む必要があると

考える。

我々学園に職を奉ずる者は、学生・生徒たち一人ひとりの能力と希望に応じ、個性的かつ魅力的な教育を展開していかねばならない。創立 80 周年を間近に控えて、この一年を各校園が共々に切磋琢磨し、独創的な魅力を高め、競争的環境の中で、共に大きく前進する好機となることを心から期待する。

チャールズ・ダーウィンはその著「種の起源」で生き残る種とは、「変化に対応できた種である」と言っている。

2006 年の創立 80 周年に具体的に花として咲き、実を結ぶことを願っている。